

樽一物語 創業から発展期へ～その7 時流

高田馬場（昭和43年開店）、池袋（昭和46年開店）、神田（昭和48年開店）、新宿（昭和49年開店）と2、3年おきに次々と開店していった「樽一」であったが、この頃の日本は経済面でみると時代の転換期であったように思われる。

前にも述べたが、「樽一」1号店を高田馬場に開店した昭和43年は、昭和40年11月から昭和45年7月までの57カ月という戦後最長の「いざなぎ景気」の真ただ中であった。しかし、昭和45年7月に景気は収束し始め、その後の昭和46年のドルショックや昭和48年の第一次オイルショックにより、高度経済成長時代は終焉を迎えることとなった。特に昭和48年の第一次オイルショックは、石油エネルギーに依存していた日本に大きな影響を与え、物価の高騰（狂乱物価）とエネルギー消費の抑制による消費の冷え込みを招いた。飲食業界もその影響を受け、価格競争により一人でも多くの客を獲得しようと激しい競争の時代になっていった。

そのような中、「樽一」はその時流に乗らなかった。店主佐藤孝は後に当時のことを次のように述べている。「確かに、時代の流れに逆らわず、流れにのることも大切なことではある。しかし、今後の流れを見つめ、まず自分自身を知ることが最も大切なことである。もし、この価格競争に巻き込まれたら、泥沼に足をとられるようなものとなる。このことだけは絶対に避けるべきだと、私は判断したのである。

私がそう判断した理由は、魚の種類やその値段というものは一朝一夕にして出来たものではなく、平凡に見える一品一品にも「樽一」のそれなりの歴史が込められていることを再認識したからである。時流に対する“自分自身の乗り方とその時期”が大切であり、私なりの信念と商法だけはいかなる時でも失いたくないと思っている。」

「樽一」が今も続いているのはこの信念ゆえであろう。